

97. 桜は散る、梅はこぼれる

今年の我が家の梅は良く咲き、寒暖の影響なのか長く楽しめた。この文章を書いている今は、ポロポロと「こぼれる」状況が続いている。

花の終わり（散り際）の表現は多彩だ。「椿は落ちる」といい、「桜は散る」という。「牡丹はくずれる」、「朝顔はしぼむ」といい、「萩はこぼれる」で梅と同じだ。

椿の花は花びらが個々に散るのではなく、萼と雌しべを枝に残してぼとりと落ちる。ぼとりでなくバサッとまとめて落ちるのも見ている。桜の散るは、無風なら「はらはら散る」か。風の強さで色々な言葉がある。

調べると、牡丹は花びらが一枚ずつ一気に散ることから「くずれる」となったという。去年の夏は羽村の農産物直売所の朝顔市で初めて鉢植えを購入した。確かに朝顔の「しぼむ」は適切な表現だと思った。

他にも調べると、「雪柳は吹雪く」、「紫陽花はしおれる、しがみつく」、「バラは枯れる」とある。「菊は舞う」であり、枯れると花びらが残り垂れるようになり、風が吹けば踊っているように見えるからという。「山吹はほろほろ」で、「山茶花はくずれる、こぼれつぐ」である。椿と山茶花の区別は素人には難しいが、友人に散り際を「椿はバサッ、山茶花はヒラヒラ」と教えて貰ったことがある。「山茶花のこぼれつぐなり夜も見ゆ（加藤楸邨）」の句もある。蛇足だが人の最後は「往く」だ。

だが、少しややこしい場合もある。「萩」は繊細で「こぼれる」は納得できると思ったら、「萩散る」は季語になっている。散りこぼれた梅の花は「零れ梅」だが、「零れ桜」という言葉もある。だから、花の終わり言葉もあまり拘ることでもないかもしれない。

では、咲き始めはどうか。「ほころぶ」「咲き初める」「つぼみひらく」など、また、満開時は「花盛り」「咲き乱れる」「咲き競う」などがあるが、どうも少ない。日本人は散り際にこそ魅力を感じてきたのだろう。花の散り際の表現は多彩で、そのような豊かな日本語の表現にこの上なく魅力を感じる。

兼好法師は徒然草 137 段で「花は盛りに、月は隈なきをのみ見るものかは（桜の花は満開だけを、月は満月だけを見て楽しむべきものだろうか）、「よろづのことも、始め終はりこそをかしけれ」（何事においても最盛そのものではなく、最盛に向かう始めと最盛を過ぎた終わりところが味わい深いものなのだ）と述べているのだが。

恵まれた四季折々の自然環境は、豊かな情緒と繊細な感情を育み、必然的に観察力を増し、日本人を日本人たらしめているのに違いないと思う。花の散り際で多くの言葉（語彙）を使い分けられるのはその一例だろう。このような環境に生まれ、生きていられるのは幸運とも思う。

（少し論調が変わるが）今、グローバリズム（地球主義）の時代ということで、国際人を目指して国語より英語という風潮があるとすれば烏滸の沙汰だ。真の国際人は自国のことを知らなければならぬ筈だ。自国の言葉を深く知らなければ、思考も深まらない。思考を深めるには言葉（語彙）が必要だ。語彙が増えれば思考力も表現力も増す。逆に語彙が貧しければ思考も表現も貧しいことになる。

語彙を増やし、思考力を増すのに必要なのは国語の教育だ。特に小学生には、英語より国語だ。古典文学を、伝記を、小説を沢山読み、もののあわれを知り、情緒を育むことが人の教育の基本だと思う。そしてもう一つは論理的な訓練が必要だが、これは算数（数学）だ。

何のことはない、昔からいう「読み書きソロバン」が大事だということだ。藤原正彦氏（数学者）は、「国語を忘れた民族は滅びる」、「一に国語、二に国語、三、四がなくて五に算数」と主張している。少し極端だが、宜なるかな、だ。ハウツー的なものの教育は少なくて良いのだ。

だが、後期高齢者になった者はどうすればいいのか。年寄りこそ、普段の生活の中で日本語を大事にするのが良いのではないかと思うのだが。

（2025年3月9日）